

平成20年5月31日
サンフランシスコ産業情報センター
駐在員 杉本安信

Waste Expo 2008 にみるアメリカ廃棄物処理産業の動向

キーン、キーン。毎週1回、私の自宅前には不思議な金属音を響かせるトラックがやってきます。家の前に止まるとロボットのようなアームが伸びてきて、大型のごみ箱を掴んで持ち上げ、裏返しにしてトラックの荷台にごみを投げ入れます。日本では手作業で行われる家庭ごみの収集も、ここアメリカでは違った光景を見ることができます。

普段の生活の中で、ごみの分別は日本と比べてやや大雑把な印象を受けますが、消費大国のアメリカの中で、ごみ処理への人々の意識や産業の動向は気になるところです。

そうした中で、このほど廃棄物処理をテーマとするトレードショーが、5月5日から3日間にわたってイリノイ州シカゴ市のマコーミックセンターで開催され、当センターでも展示会について調査をしましたのでご紹介します。

<Waste Expo とは>

Waste Expo は、廃棄物の処理技術に関するトレードショーで、1968年にシカゴで第1回目が開催され、今年で40回目を迎えます。このイベントは会議と展示会により構成され、会議では、40にのぼるセミナーとワークショップが企画されました。また、展示会では、大型のごみ収集車をはじめ、ショベルカー、圧縮機、堆肥装置、分別機、断裁機、収容コンテナ、クレーン車、埋立地用機材、リサイクル機材・施設設備、消臭機材、医療廃棄物処理機材、運搬車両管理システムなど幅広く出品されました。

主催者のNSWMA(National Solid Wastes Management Association / 全米廃棄物管理協会)の情報よれば、公共部門、民間部門から530社・団体が出展し、総参加者数は11,000人に達する見込みとのことで、この分野ではまさに北米最大のトレードショーと言えます。

会場内で関係者が個別に商談を行える国際ビジネスセンターが設けられていましたが、利用希望は年々高くなってきているとのことで、関係者が熱心に商談を行っている様子が窺えました。

また、今回のトレードショーでは、医療廃棄物処理に関するイベント「Medical Waste Expo」が併催イベントとして開催されましたが、主催者情報ではこの分野への関心が年々高まっており、重要性を増しているとのことでした。

<関心高まるグリーン技術>

主催者であるNSWMA(全米廃棄物管理協会)の会員サービス課長・クリスティーン・ハッチャーソン氏によると、今回の展示の特色としては、多くの展示ブースで「グリーン技術」という言葉が使われ、環境によいことを前面に出す企業が増えているとのことでした。

会場内には、日本では見られない大型のごみ収集車が多数展示されていましたが、中でもハイブリッドカーがいくつかの企業ブースで展示されており、目を引きました。ある企業ブ

ースの職員の話では、家庭ごみの収集では頻りに車が止まることからハイブリッドは向いておらず、むしろレストランのごみの収集など、比較的まとまった距離を走る車であれば、効果が出るとのこと。

また、廃棄物処理場から発生するガスの収集技術が近年注目されており、それをテーマとするセミナーも企画されていました。

このほか、太陽電池でごみを堆肥化する装置などは日本でも開発されていますが、ビンや缶を太陽電池で自動的に圧縮し、収容量を増やす装置を備えたごみ箱なども出品されていました。

前述の NSWMA（全米廃棄物管理協会）の会員サービス課長・クリスティーン・ハッチャーソン氏は「廃棄物処理産業は成長を続けている。市民の意識は変りつつあり、この分野の関係者はその変化を掴み取らなければならない。」と述べています。

愛知、名古屋地域では、「愛・地球博」の理念を継承する事業として、環境・エネルギーをテーマとする総合見本市「メッセナゴヤ」が2006年から毎年開催されています。環境技術では日本の先進技術が国際的にも注目されていますが、ガソリン価格の高騰を背景に環境技術への関心が一層高まりをみせている北米市場の動向や最新技術について、今後注目していきたいと思います。



Waste Expo 会場内の様子



Waste Expo 会場でのハイブリッドトラックの展示



家庭ごみの収集の様子1（ごみ箱を持ち上げる）



家庭ごみの収集の様子2（ごみを荷台に入れる）